

水稻糯品種「ヒメノモチ」の安定栽培法と栄養診断

(農試県南分場・環境部)

1. 背景とねらい

本県では生産団地を中心に糯米の生産が行われ、ますます良質安定多収技術の確立が要求されている。

しかし、これまで糯米の栽培法に関する知見は少なく、十分な対応は不可能であった。このため、県中南部の糯米の代表品種であるヒメノモチについて、本年度までに得られた成果をもとに、良質安定多収を目標として、10a当り600kg以上を維持するための栽培法について指導上の参考に供する。

2. 技術の内容

(1) 収量水準600kg/10aを得るための期待生育量

穂 数 (本/㎡)	一穂粒数 (粒)	㎡当り粒数 (粒)	玄米千粒重 (g)	登熟歩合 (%)	稈 長 (cm)
380 ~420	75 ~85	28,000 ~33,000	22.0	80 ~90	80 ~85

(2) ヒメノモチの栄養診断基準

項 目	6月下旬	幼穂形成期	出 穂 期
稲体乾物重(g/㎡)	80~110	280~380	850~960
茎葉窒素濃度(%)	2.8~3.8	1.6~2.0	1.0~1.3
窒素吸収量(g/㎡)	2.2~4.2	4.5~7.6	8.5~12.5

(3) 栽培法

ア、施肥法

(ア) 基肥

基肥窒素量はおおむね「キヨニシキ」並の4~5kg/10aとする。

(イ) 追肥

追肥時期	分けつ期	幼穂形成期	減数分裂期
効 果	×	○	◎

◎：重点

○：地域性

×：不適

①分けつ期の追肥は穂数増加への効果は少ないが、キヨニシキに通常施肥している地域では施用する。

②追肥の窒素成分に非常に敏感で程が伸び易いので、減数分裂期追肥（窒素成分 $2\text{kg}/10\text{a}$ ）を重点とするが、地域性・生育に合わせて幼穂形成期追肥（窒素成分 $1\text{kg}/10\text{a}$ ）を行う。

イ、刈り取り適期

刈り取り適期は登熟積算温度（平均）が $950 \sim 1,050^\circ\text{C}$ の範囲で、刈遅れによる品質低下（特に茶米）に注意する。枝梗及び立毛中の籾の黄化割合で判定する場合は、いずれも 80% 程度からとなる。

（４）栄養診断基準

ア、葉色による窒素濃度の推定（幼穂形成期）

測定法	葉色測定値
SPAD葉緑素計	39～43

イ、稲体乾物重の推定（6月下旬から穂孕期直前）

$$\text{乾物重}(\text{Kg}/10\text{a}) = (a \times \text{「草丈}(\text{cm})\text{」} \times \text{「株周}(\text{cm})\text{」} + b) \times \text{㎡株数}(\text{株})$$

$$\text{但し、} a = 0.023 \quad b = 2.87$$

ウ、窒素吸収量の推定（6月下旬から穂孕期直前）

①乾物重推定式と葉色測定値を利用する場合

$$\text{窒素吸収量} = (a \times \text{「草丈}(\text{cm})\text{」} \times \text{「株周}(\text{cm})\text{」} \times \text{「葉色測定値}(\text{SPAD})\text{」} + b) \times \text{㎡株数}(\text{株})$$

$$(\text{Kg}/10\text{a}) \quad (\text{cm}) \quad (\text{cm}) \quad (\text{株})$$

$$a = 2.87 \times 10^{-4} \quad b = -0.08$$

②拔取り株の風乾重と葉色測定値を利用する場合

$$\text{窒素吸収量} = (a \times \text{「乾物重}(\text{g}/\text{㎡})\text{」} \times \text{「葉色測定値}(\text{SPAD})\text{」} \times b) \times \text{㎡株数}(\text{株})$$

$$(\text{Kg}/10\text{a}) \quad (\text{g}/\text{㎡}) \quad (\text{株})$$

$$a = 0.01 \quad b = -0.1 \quad (\text{葉色測定値はSPAD葉緑素計値})$$

3. 指導上の留意事項

- （１）穂数を確保のため植付本数・栽植密度は落とさず、1株当り4～5本植え、㎡当り22.2株程度とする。
- （２）幼穂形成期の追肥は倒伏を助長する場合があるので、追肥の判断は生育量・葉色を十分考慮して行う。
- （３）穂発芽しやすい品種なので、降雨の続く年は早めに刈り取りを行う。